



「さいごまでみてね」

受賞者：河野 佳代さん

コロナ禍の初冬。息苦しさを訴えた父は、検査の結果緊急入院となった。

肺がん。余命3カ月。

面会禁止の病棟の奥に消えていく、車椅子の父の背中。

自動ドアが、目の前で静かに閉じる。

私は看護師だ。冷静になれ。これから何が起きるのか予測が出来る。

ケアマネさんに連絡して、在宅の準備を整えよう。

大丈夫。これまで多くの方の人生の最期を、共に過ごさせていただいたのだ。

家族とも、いつかは別れの時が訪れることを覚悟してきたはずだ。

頭は冷静に働くのに、胸が痛くて涙が止まらない。

父と家族にとって最善の看護師であろうと心に誓いながらも、娘としての私は不安で一杯だった。

自宅に戻った父は、医療用麻薬に抵抗を示していたが「佳代が良いと言うなら、使う」と受け入れてくれた。安楽な姿勢、便秘の調整、呼吸法。

佳代が言うことをやってみたら呼吸が楽になったと、喜んでガラケーで報告してくれた。

どうか、この穏やかな時間が続きますように、と空に祈る日々。

でも、その祈りは届かなかった。

急激な呼吸状態の悪化に、胸を押さえて脂汗を流す父。

医師の到着まで30分。

瘦せた背中を擦りながら、私はせきを切ったように号泣してしまった。

「何もできなくても、そばにいたことが力になるのですよ」

たくさんの家族に掛けてきた自分の言葉が、むなしく頭をよぎる。

苦しむ本人を前にして感じる無力感は、圧倒的だった。

鎮静が始まる直前の、父の言葉。

「ありがとうね。さいごまでみてね。お世話になります」

「うん。約束する」

最後の会話は、看取りまでの折れそうな私の心を支え続けてくれた。

早春の静かな朝。小さくなる父の呼吸を見つめながら手を握った。

「ずっと信じてくれてありがとう」

詰まる声を振り絞って声を掛けると、力強く握り返してくれた。

その時、気づいた。

「さいごまでみてね」は、見てね、観てね、見てね。父の願いが全て込められていたのだ、と。

看護師の娘である私を、育ててくれた言葉だったのだと。